

一般演題

1. 甲状腺中毒症の¹³¹I治療成績

内村 文昭 佐藤 幸雄

(山形県立中央病院・放)

山形県立中央病院では、昭和42年より甲状腺中毒症の患者に¹³¹I治療を施行している。

今回、過去18年の治療成績を総括した。

対象数は145例で、年齢別では30歳代から50歳代までに多く、男女比では1:2.6であった。

¹³¹I治療のみでの機能正常例は121例(83.5%)、機能亢進例18例(12.4%)、機能低下例6例(4.1%)であった。¹³¹I1回投与例は129例(89%)であった。

機能低下例は吸収線量が60 Gy以上特に70 Gy以上での発現が多く、機能亢進例は50 Gy以下での発現が多く認められた。

経過観察年数による晩発性甲状腺機能低下例は、今回の統計上認めず、さらに追跡調査が必要であることを述べた。

また¹³¹I投与後の癌化症例のないことを追加した。

2. 当院における甲状腺機能亢進症のNa¹³¹I治療の検討

畠山 隆 竹下 元(市立函館病院・放)

鎌田紀美男 篠崎 達世(弘前大・放)

Na¹³¹I治療を行った甲状腺機能亢進症19例につき臨床的検討を行った。対象は男4名、女15名で、男女比は1:3.8であり、年齢は40代の女性が過半数を占めた。

経過観察期間は2年以上が16例(84.2%)、5年以上が4例(21.2%)であった。

Na¹³¹I治療回数は1回が13例(68.5%)、他の6例(31.5%)は2回投与であり、治療線量としては初回5,000 rad、2回目以後は3,000~5,000 radであった。

1回投与群では4年目にて全例が機能の正常化をみとめた。19例全体での現在(昭和60年5月)の成績は機能正常12例(63.2%)、機能亢進6例(31.6%)、機能低下1例(5.3%)である。

3. I-131 MIBGの使用経験

丸岡 伸 中村 護

(東北大・放)

1984年5月から1985年5月までに褐色細胞腫が疑われた18例に対し、I-131 MIBGシンチグラフィを施行した。うち褐色細胞腫と確診されたのは7例で、内訳は副腎褐色細胞腫3例、副腎外褐色細胞腫1例、Sipple症候群2例、悪性褐色細胞腫1例で、Sipple症候群の1例を除く6例はその後手術を施行され、摘出腫瘍の重さは17~324 g平均145 gで、Sipple症候群の甲状腺髄様癌の大きさは6×5 mmと小さかった。褐色細胞腫は7例全例で良好に描出され、悪性褐色細胞腫の骨転移巣にも異常集積を認めた。Sipple症候群例では褐色細胞腫の描出は良好であったが、髄様癌は描出されず、腫瘍の大きさが一つの問題であったと思われる。褐色細胞腫例では2日目以降で心臓への集積の強いものはなく、中條らの報告と一致した。Backgroundの低下する2日目ないし3日目の像が診断に適していた。

4. ¹³¹I-MIBGが転移巣検出に有用であった神経芽細胞腫の一例

星 宏治 木村 和衛(福島医大・放)

戸川 貴史 鈴木 晃(同・核)

症例は4歳の女兒。左副腎の腫瘍摘除後の経過観察中であつた患者である。尿中HVA、血中LDHの再上昇、CRPの陽性化等から神経芽細胞腫の再発・転移の出現が疑われ、¹³¹I-MIBGシンチグラフィが行われた。その結果、¹³¹I-MIBGシンチグラフィは、神経芽細胞腫の転移巣検出に際し、きわめて有用な検査法であると考えられたので報告した。